

Title	悪の存在について : Henry James : The turn of the screwをめぐって
Sub Title	The innocence and evil in Henry James's The Turn of the Screw
Author	足立, 康(Adachi, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.13, (1961. 12) ,p.48- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00130001-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

悪の存在について

——Henry James: The Turn of the Screw をめぐって——

足 立 康

I

ある作品が何を意味し、どのような評価を受けるべきであり、又、いかなる問題を提示しているかについて語るとき——つまり、ある作品について何らかの形で語るとき、私は常にそれが「私にとって何であるか」というごく初源的な問いに立ち帰ることを余儀なくされる。例えば作品に現れるさまざまな形象が、これこれしかじかの内容を包含し、歴史的、文芸学的にこのような意味があり、それが何物かの象徴であると分析したとしても、一介の読者としての私に何ら動的な関係を持ちえないとしたら、その分析は全く白々しいものになり果ててしまうであらうし、そもそも議論自体を私はすべきではないということにある。

私がこのようにいわば当然ともいふべきことをいい出したのは、今小論を草するに当って、私自身の態度に確信が持てないからであり、又、対象への接近の方法が判然としないままに小論を始めようとしている自分への疑問と多少の自己弁護を表明したくないからに他ならない。「私にとって何であるか」と私はいったが、第一「私」とは私にとって何であるかが判然としないのであるから、こ

の小論そのものの不明瞭さは、まさにそこにおいてきわまったといふべきである。もちろん、私とてもフロイド的に ego, super-ego という観点を設定して自己を分析するにやぶさかではないけれども、いかなる本質的存在も、その構造についての考察によるより、私の意志の中で意志する私、つまり ego を体験する ego の混乱した状況においてのみ、その混乱した状況における主観的な認識によつてのみ語られるべきであるという思いから私は脱することができない。自己について語ることこそこの主題ではないが、混乱した状況の中で折屈的に主観的認識を意志すること、これを描いて私にとつての「私」はないように思われるのである。つまり、書かれる言葉語るべき対象の撰択は、あいまいな用語をあえて用いるなら、私の主体的な経験から出発すべきであり、従つて私の小論は何ら実証的、説得的意図を持つものではなく、ひいては、一つの作品を撰択し、それについて公に語るといふ行為自体に、私が限らない不安と困惑を感じる所以ともなるのである。だが、Henry James の特に後期の作品のいくつかは、今のべたような困惑した自己を体験し、そこで何物かに向かう主観的な意志を反芻するには、かなり適当な材料であるように思われる。James の *The Art of Fiction* についての挿話を記してみる。

I remember an English novelist, a woman of genius, telling me that she was much commended for the impression she had managed to give in one of her tales of the nature and way of life of the French Protestant youth. She had been asked where she learned so much about this recondite being, she had been congratulated on her peculiar opportunities. These opportunities consisted in her having once, in Paris, as she ascended a staircase, passed an open door where, in the household of a pasteur, some of the young Protestants were seated at table round a finished meal. The glimpse made a picture; it lasted only a moment, but that moment was experience. She had got her direct personal impression, and she turned out her type.... The power to guess the unseen from the seen, to trace the implication of things, to judge the whole piece by pattern, the condition of feeling in life in general so completely that you are well on your way to knowing any particular corner of it—this cluster of gifts may almost be said to constitute experience, and they occur in country and in town, and in the most differing

stages of education. If experience consists of impressions, it may be said that impressions are experience, just as (have we not seen it?) they are the very air we breathe(註一)

これは James の心理主義的な小説理論を明らかに語っている挿話であるが、to guess the unsen from the seen が only a moment において行なわれること、そして that moment was experience であるというところから、私は二つの意味を汲み取りたいと思う。第一は、小説技法上の問題であつて、そのような moment の上に type, 作品の form が形象化されること、第二は、その瞬間に作家の決断がなされることである。第一の点が私にとって従の意義とか持たないことは既に述べたが、James がそれに関連して行われる決断を少くとも意志的に行っていた作家であつたことが James の今日的意味であるといえないだろうか。もちろん、James は Daisy Miller や The Americans などのポピュラーな作品において観取される通り、大変な小説巧者であるから、その語り口の面白さは決して無視することはできないし、テクニクが更にテクニクを呼び、何枚ものヴェールで覆われているような The Sacred Fount などを生み出すに到つた面を軽視してはいけなひだろう。私の前に置かれた作品は既に the seen として、作者の巧みな技法で鍊り上げられたものに相違ないし、その作家の unseen な原点、ひいては私自身の原点について考察するよすがとしては、the seen しかありえないからである。従つて、作品に何らかの意味で魅せられ、それについて語りたい時先ず客観的な分析を必要とするであろうが、それは私にとって、the unseen への接近の手段なのであつて、私の内面の情熱と、作者の主体の情熱という原点とを、混乱し折屈した状況の中で重ね合わせることに以外に、その目的はないのである。私が私なりに James について語りたい欲望を感じるのは、彼において、この原点が少くとも意識的であり、しかも教条主義的な色彩を持たず、造られた作品が十重二十重にその原点を取り巻いているように思われるからである。(James がそこに到つた伝記的、社会的な原因に關する考察はここでは行わない) 手法の複雑さはいわば謎解きの面白さも同時に持ちえるが、繰り返していうなら、謎を解いた後には結局私の主体にとって必要なものは何一つ残らない。それから後は、私の主観的な志向によって、これもかなり主観的な分析の結局得たものについていくらか語ろうと努力するにすぎないということ、先ず表明しておく必要があるというだけのことである。

Henry James については既に質量共に龐大な数の言及がなされて来たし、わけでも第三期の作品に属する *The Turn of the Screw* について語られたことは数多い。先年 Thomas Y. Crowell Company から出版された *The Turn of the Screw* に関する Case Book は本来啓蒙的な目的で編まれたものらしいが、Edna Kenton, Edmund Wilson の他、各大学の Review 類に掲載された諸論文が再録されて、James の rival の意味と契機を明確にする上で、きわめて有益でもあり、便利でもあるものだが、あれほどの多作家であった James の諸作品の中で、*The Turn of the Screw* が短いながらも、特に the unseen について主観的な思惟をめぐらす多くの視点を提供していることを、私に改めて考えさせる良い手引きとなったといえる。それは主として *The Turn of the Screw* の ambiguity を中心に議論され、具体的には、そこに画かれた Jessel と Quint の幽霊の解釈に、論議が集中されているように見える。私はこれらの諸論文等を参考にしながら、まず、この物語りの語り口について考え、その上で ambiguity の由来する所以について考え、更に、それらが私にとってどのような関わりを持つかについて考える筈である。

II

物語りは 'The story had held us, round the fire, sufficiently breathless, but except the obvious remark that it was gruesome, as on Christmas Eve in an old house a strange tale should essentially be....' という前置きで始まる。読者はこゝで、round the fire ではないけれども、James の語り出す語り口に先ず引きつけられ、これから始まる gruesome な物語りに興味と期待を抱かせられる。語り手をすっかり魅了した不気味な話というのは、子供に幽霊が出た話なのであるが、その内容は語られない。そして、第二の語り手、Douglas が重い口を開く。If the child gives the effect another turn of the screw, what do you say to two children? という。それを受けて、誰かが叫ぶ。We say of course that two children give two turns! と。この部分は主たる物語りのいわば導入部であって、女家庭教師とその教え子に現れる ghost というテーマとは直接のかかわりを物語りに何ら持たないように見えるが、後で展開される話を解く鍵がここにあることは、多くの評者の意見が一致している。しかし、私は、先ず小説作法の巧みさという観点から、粗獷に、この導入部に注目したい。導入部の幕が開かれると、そこでは既に物すごい物語りが一つ語り終えられたところである。更に、一

段と不気味な話がこれから語られることが暗示される。しかも、それは経験者である女家庭教師によって書かれた手記であって、わざわざこれから取り寄せるものだという——こうした巧みな設定によって、読者の興味は一段とそえられる。主たる物語りの謎を解くという点は一応置いて、単に語り口一つから考えても、将に two turns of the screw が巻かれたということが、最初のわずかに二頁で読者に暗示されてしまうのである。このような巧みさは、単に構成についてのみいえるのではなく、James の語の撰択がいかに精緻をきわめたものであって、さまざまの語に何重ものねじが巻かれているかについては Robert Heilman のたねねんな分析^{註2}がある。Heilman の分析は、もちろん物語りの内容に迄立ち到っているものだが、語と語の重ね合わせから、いかに最大の効果を生むようになるかにも言及し、こらしにこらした技巧の網の目をほごしてくれるという意味も持ち合わせている。そういう意味でも、最初に出て来る the turn of the screw という語は示唆的であり、そして、この複雑な印象は最後まで消えることはない。

読者にとっては、この複雑な印象を得れば、実はもうそれで既に充分なのであって、後は読者自身の中で行なわれる自由な思惟を記述することしか残されていないであろう。私は以上のような粗獷な文学的驚ろきを何より大切にしながら、論を進めて行かなければならぬ。

私は今“*The Turn of the Screw*”は始めから何重もの screw が turn されているといったが、語の撰択という問題以外に、その鍵は point of view にあると Leon Edel はいう。^{註3}彼はまず、この物語りがいわば三人の話者を持っているし、そして、それぞれの設定が the reader is led unsuspectingly to accept the narrator in good faith になるために大きな意味を持っているという。この三人の narrator は、^{註4}“The first is the individual, perhaps James himself, who begins by telling us, “*The story had held us, round the fire……*”；Douglas is……Second Narrator, but not technically, since his account at first being quoted or summarized by the First Narrator (……James の巧緻を私は見たい。第二の話者でありながら、実は第一の話者の心理を経る話者にすぎないのだ)；Then, finally, Douglas begins to read the manuscript and the Principal narrator’ the governess, takes over. The story we are finally given is hers, and it is told in the first person. Douglas and the First Narrator disappear, never to return. (これが即ち第三の話者である)” Edel はこの三人の話者の設定から、governess の手記に描かれる事件の起った時と、その事件が Douglas に

語られた時との間の時間的な経過と、その間の女家庭教師の人間的成長、及び Douglas の人柄の描写などから、Most readers have tended to accept her story as "fact" partly because Douglas has given her such a good character at the outset and particularly because of the cunning which James has employed in telling the story. どういふいふなるか、実は、We must remember that we are receiving from governess her story and her interpretation of what she saw or imagined. We are entirely in her mind. なのだから。つまり、第三の話者、女家庭教師の視点から主たる物語りは語られるのであるが、それは導入部における第一・第二の話者によって、巧みに粉飾をほどこされてゐるといふわけである。そして、My values are positively all blanks save only so far as an excited horror, a prompted pity, a created expertness. どういふ James 自身の preface にのべられた言葉を引用し、これこそ stream-of-consciousness の作家の方法であつて、the area of fact と the area of fancy に属する二つの物語りが平行して語られてゐるのだと結論する。即ち、作者はいわば自からの物語りのすべてを語らなうのであるから、読者は常に、The reader's mind is forced to hold to two levels of awareness: the story as told, and the story to be deduced. どういふことになるべきなのであり、この二つの物語りを繋ぐものは、それぞれの読者の想像力なのである。私は The Turn of the Screw をまず James の粗獷な物語り巧者と二つ点から眺めたが Edel の以上の見解はこの物語りを語る第二の拠点となるように思われる。女家庭教師が語る自からの行為に含まれる矛盾は、そのまま矛盾として放置して置くべきものであつて、残された問題はもっぱら読者の想像力による the story to be deduced に関わるものになるからである。Douglas がいふよう governess の手記を読み始めた時に居合わせた his little final auditory more compact and select のように、われわれは妬をかくんで、to subject to a common thrill すれば良うのである。従つて、女家庭教師の語る Quint と Jessel の幽霊が実際に現れたものかどうか、彼女の環境や性的抑圧などによる単なる hallucination なのではないかという議論は、私にとってさほど興味がなく、ただ、an excited horror, a prompted pity などが、なにゆゑ喚起され、そして、私によって何を暗示するかについてのみを述べるに止めたい。

ただ、いふ迄もなく、導入部は単なる装飾にすぎないとは決していえない。そこには作者の説明ではなく、意図が、少くとも二つの点で暗示されているように思われるからである。第一は、子供に幽霊が出る話がかつら gruesome なものとして強調されてゐること

第二は、愛と死が表裏一体をなしていることが暗示されている点である。前者については後にのべるが、後者は、この物語りをうらぬいている逆説的なある概念が、既に導入部で暗示されているという観点から注目すべきであるように思われる。即ち First Narratorを除いては、Douglas も governess も既に故人となっていること、即ちこの物語り自体が、故 Douglas の思い出と、故 governess の手記から成って居り、しかも、三者の間の信頼関係が暗示されていることである。物語りが ghost story の形を取っている以上、その基調をなすトーンは死であることはいづをまたない。そして、第一の話者と Douglas との信頼関係はを暗示する雰囲気は導入部全体に流れているし、次のような箇所にも具体的に示されている。

I can see Douglas there before the fire, to which he had got up to present his back,.....^{註4}

He continued to fix me, "You'll easily judge" he repeated, "you will"^{註5}

Douglas と governess の関係について、彼らの年令の差にも拘らず、^{註6} "She was a most charming person,....." とか、"I liked her extremely and am glad to this day to think she liked me too. If she hadn't she wouldn't have told me. She had never told any one" とならい、Douglas の彼女に関する言及がなされ、かゝる "And is the record yours? You took the thing down?" といふ第一の話者の問いに対して、Douglas は "Nothing but the impression. I took that *here*"——he tapped his heart. と答へつゝ、更に、governess が恋していたのは Harley Street の a gentleman, a bachelor in the prime of life. とあるといふ証拠はここにもなく、governess の手記自体が Douglas に手渡されたものである以上、彼女が Harley Street の紳士に Douglas を擬していたということすら臆測することができる。つまり、ここでは愛は死であり、死の思い出は愛の思い出と同一なのである。

しかし、Douglas の heart にある impression は title を持たない。"What's your title?" と尋ねられ、彼は "I haven't one." と答へる。すなわち第一の話者は "Oh, I have!" といふ^{註7}。そいつ James のつけた title は The Turn of the Screw なのだから、実に

ねじは複雑に巧みに巻かれているということになる。

III

私は複雑なねじを既に三つ巻きもどして来たつもりである。第一は James の技巧であり、第二は視点であり（これに導いて、私は女家庭教師の語る物語りの合理性は一切問わず、もう一つの物語りを自分なりに探ろうとしていることは既にのべた）第三は導入部の持つ意味である。そして第四は、導入部において与えられている（“If the child gives the effect another turn of the screw, what do you say to two children——?” “We say of course that two children give two turns.”）幽霊と子供の関係にあるように思われる。何故 Two children give two turns of the screw なのかは導入部の Douglas の口から次のように語られる。

“I quite agree—in regard to Griffin's ghost, or whatever it was—that its appearing first to the little boy, at so tender an age, adds a particular touch.

いう迄もなく子供は innocence と purity の象徴と普通考えられている（例えば、聖書でもイエスはしばしば幼な児を讃美したことがのべられている。ルカ伝一〇章一四節には——幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である）から、何ら身に覚えのない者が異常な体験で苦しむのは、それだけ残酷な事件ということになるわけである。物語りの女家庭教師も、彼女の二人の教え子 Miles と Flora について、様々な形容を用いて讃美している。しかし物語りが governess の視点から物語られていることを念頭に置きながら二人の子供たちを見ると、彼らの美しさとその変貌が物語りの焦点であることがわかる。Oliver Evans もこれを指摘して次のようにいふ。The horror of the real world, indeed, be in exact proportion to the charm of the apparent—which is why James makes his children the very personification of youthful beauty and innocence, and provides for them such an idyllic setting.——Again and again it is emphasized to the reader that the beauty of these children (like that of

Dorian Gray) is a ^{註9}lie. 先ず子供の美しき、無邪気な口を極めて讚美し、かつ、それがすべて嘘であったということになれば、裏切られたという印象は一段と強まるのは道理である。

しかし、注目すべきは、これが彼らに現われる ghost が悪であって、無垢な子供たちはただそれに傷めつけられて行くという、通常の物語りではなく、女家庭教師は ghosts の出現によって、子供たちの仮面に気づき、その変貌に苦しむという点である。先ず彼女は、ghost の目当てが自分ではなく子供たちであることに気づく。

"He (Peter Quint) was looking for some one else, you say—some one who was not you?" "He was looking for little Miles." A portentous clearness now possessed me. "That's whom he was looking for."^{註10}

"Tell me how you know," my friend (Mrs. Grose) simply repeated. "Know? By seeing her! By the way she looked." "At you, do you mean—so wickedly?" "Dear me, no—I could have borne that. She (Miss Jessel) gave me never a glance. She only ^{註11}fixed the child."

女家庭教師は ghosts の目当てが子供たちであることに気づくと、同時に子供たちも ghosts に魅せられているのではないかと悩み始める。つまり、彼女の視点から、子供たちが変貌を始めるのである。R. Heilmann もそれに言及して次のようにいう。For a mature reader it is hardly necessary to insist that the center of horror is not apparitions themselves—, but is the children, and our sense of what is happening to them.—the governess's awareness of the apparitions is her awareness of a change within the children.——彼女^{註12}は Mrs. Grose と次のような会話を交わすことによって、自から子供たちの変貌を確信するが、終りには Flora が肉体的にも素顔を現わしてしまつたように思われるに到る。

“—Their more than earthly beauty, their absolutely unnatural goodness. It's a game, it's a policy and a fraud.” “—They haven't been good—they've only been absent. It has been easy to live with them because they're simply leading a life of their own.”

I had said shortly before to Mrs. Grose that she (Flora) was not at these times a child, but an old, old woman,.....

—her (Flora's) incomparable childish beauty had suddenly failed, had quite vanished. I've said it already—she was literary, she was hideously hard; she had turned common and almost ugly.

既にのへたように、子供たちの姿貌は、ghosts 出現の意味であったが、彼女によれば、ghosts は子供たちに対して次のようにあるのだ。

For the love of all the evil that, in those dreadful days, the pair put into them. And to ply them with that evil still, to keep up the work of demons, is what brings the others back.

即ち、ghosts は innocent な子供の特質に対する evil なのである。the work of demons なのである。ghosts は彼女によれば、単なる horror の原因なのではなく、道德の意味を持つようなものがある。F. O. Matthiessen は—in works as different as *The Turn of the Screw* and *The Wings of the Dove*, James showed an extraordinary command of his own kind of darkness, not the darkness of passion, but the darkness of moral evil. (Matthiessen の James 論は非科学的であるが、彼が持つものは、(鬼魅的な) 人間の governess の秘極め、肉体的、現実的なそれと異なる、むしろ moral evil を秘めるための秘極

であるといふべきであるように思われる。

普通、子供を例として evil と innocence の問題が比喩的に語られる時は、聖書の一節を思い出すのが常である。「この幼なるように自分を低くするものが天国でいちばん偉いのである。また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまづかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる（マタイ伝一八章四一六節）」聖書を釈義する時に比喩の字句にあまりにも忠実すぎることは非常な問題があるが、まず伝統的な evil と innocence の問題はどのように対立的存在として考えられて来たといえようし、女家庭教師自身も、この比喩に引用されている天使のような子供であった教え子が、evil を歓迎しているらしいことを確信するに到って、破局へまっしぐらに進んで行くことは既に指摘した。Charles Hoffman もこの点に言及し、*In The Turn of the Screw* the choice of children as the central characters intensifies the vision of evil James sought to achieve because of the discrepancy between the traditional Christian myth of the innocence of children and their corruption as gradually revealed in the novel. ^{註21} といっている。伝統的な innocence の symbol が evil に変つて行くこと、そして一方には Harley Street の紳士から負わされた責任感と義務感が重くのしかかり、それらが彼女を苦しめているのである。彼女は Harley Street の紳士に恋しているらしいことが暗示されているが、その恋は彼女の視点からは、「わたしを信ずるこれらの小さい者をつまづかせる者」に自からがなりたくないといふ、きわめて道徳的な表現となつて現われる。

——I was in these days literally able to find a joy in the extraordinary flight of heroism the occasion demanded of me. I now saw that I had been asked for a service admirable and difficult; and there would be a greatness in letting it be seen—oh in the right quarter,——that I could succeed where many another girl might have failed.——I was there to protect and defend the little creatures in the world the most betrayed and the most lovable, the appeal of whose helplessness had suddenly become only too explicit, a deep constant ache of one's own engaged affection. We were cut off, really, together; we were united in our danger. ^{註22}

従って、彼女が Flora の完全な変貌を知り、遂に自分が少女を救いえないときとる終局では次のような言葉が口からもれることになる。

"Flora has now her grievance, and she'll work it to the end."

"Yes, Miss; but to what end.?"

"Why that of dealing with me to her uncle. She'll make me cut to him the lowest creature—— ——— What Flora wants of course is to get rid of me."^母

即ち、子供に ghosts が現われるという事件は、女家庭教師にとって、二つの意味を持っていることになる。第一は、あえていうなら traditional christian myth であって、子供の innocence への信仰が目前に破壊されていくこと(従って、彼女にとって ghost への恐怖は、ghost そのものへの恐怖ではないことが何度も強調されているのは当然ということになる)第二は、第一の点に関連して自からの道徳的観念が圧迫され、愛情と evil に対する憎悪の境界が判然としなくなってしまうこと(evil への憎悪と子供、即ち innocence への愛情が共時的存在であり、かつ、Flora の変貌への憎悪と Harley Street の紳士への愛情、信頼が共時的存在であることは既に指摘した)である。

私はこの章の始めに the turns of the screw の第四は子供に ghost が現われることの意味にあるといったが、以上がその私の結論の一つである。先に導入部について、愛と死の同一性について触れたが、ここでも、思考の形態としては恐らく類似した、相反する二つの命題の一致を見出したというわけである。しかし、私は更にねじを巻きもどす操作をつづけなければならない。そしてそれは、子供と幽霊という関係に関わるもう一つの意味である。

IV

この物語りにおいては、子供と幽霊（乃至は子供の中に反映した幽霊）は *innocence* と *evil* であること、そしてこれらはいわば宗教的な価値概念に根ざすものであることは既にのべた。そして、この物語りにおいて注目すべきは、これが子供たちに現われる *ghost* が悪であり、無垢な子供たちがただ外側からの悪によって *spoil* されて行くという単純な筋立てを持たず、子供自身の変貌が女家庭教師に悪の存在をまざまざと認識させるという点にあるということにも若干触れた。即ち、問題は *innocence* と *evil* が相互に如何に關わっているかという点なのである。少くとも、先に引いたマタイ伝の比喩のように、誘惑するものとされるもの、という相對立する存在としては描かれていないことができよう。子供の変貌という言葉を私は何回も繰り返して使ったが、*innocence* と *evil* が共時的存在であることを現わしているのに他ならない。C. Hoffman はこの点から *Innocent* と *Evil* の論を進めているのであって、——in *The Turn of the Screw* *innocence* and *evil* coexist as *evil-in-good*.^{註17} 彼によれば、James はやがてやがて *allegorical contrast* を描くことによつて、この *evil-in-good* を暗示しているといっている。物語りは始めから不吉な雰囲気をつたよわせていることは既にのべたが、最初に *governess* がかなり明瞭に *evil* の存在に気づくのは第一章においてである。Miles が学校から追われたことをのべた手紙を手にして、彼女は Mrs. Grose と次のような会話を交す。

"Is he (Miles) really *bad*?"

"Do the gentleman say so?"

"They go into no particulars. They simply express their regret that it should be impossible to keep him. That can have but one meaning. That he's an injury to the others."

"Master Miles! ——him an injury?"

"To his poor little innocent mates."^{註18}

こゝでは、また *evil* と *innocence* は共時的なものではなく、相對立するものとして語られている。*ghosts* が出現し、子供たちがそ

れを知っているのではないかと疑い始める governess にとっては、まだ二つは coexist するものではないが、それに対して Mrs. Grose の方が暗示的な質問をするのは第七章においでである。

"Perhaps she (Flora) likes it !

"Like such things—a scrap of an infant

"Isn't it just a proof of her blest innocence?" ^註

然る governess 自身も Mrs. Grose の發したと同じ疑問を抱くやうになる。

"I don't wonder you looked queer when I mentioned to you the letter from his school !"

"I doubt if I looked as queer as you ! And if he was so bad, then as that comes to, how is he such an angel now?"

"Yes, indeed—and if he was a fiend at school ! How, how, how, how?" ^註

やうして Flora が家から失跡して Mrs. Grose と共に彼女を探した出かける時、governess 自身も evil-in-good の存在を認め、次のやうに言ふのである。

"And where's Master Miles?"

"Oh he's with Quint. They'll be in the schoolroom."

"Lord, Miss !"

"The trick's played, they've successfully worked their plan. He found the most divine little way to keep me quiet while she

went off.

"Divine?"

"Infernal, then. He has provided for himself as well."^{註25}

この物語りにおいて子供に幽霊が現われることの意味は、ghost storyとしての意外性を強め、恐怖を増大させるというだけでなく、innocence と evil が共時的存在として示されていることにあることは明瞭である。そして、C. Hoffmann のいう通り、As a real quality of human experience, evil is not separate from innocence but coexists with it. For dramatic and allegorical purposes innocence and evil are presented in conflict as a duality, but the total effect of James's treatment of the theme in *The Turn of the Screw* is the ironic ambiguity that innocence and evil are reverse sides of the same coin.^{註26} というわけである。

今迄、ghosts は子供たちとの関係において語って来たが、同じことを ghosts の意味のみから考えると、Quint と Jessel の幽霊は読者に恐怖を与えるために出て来る、うらめし気な幽霊ではないことは明らかとなる。いわば、彼らは観念としての evil そのものを代表しているのであって、具体的な意味を持つに到るのは、子供にそれが反応したことが確信された時に他ならないからである。Miles が学校から追われた理由が最後まで具体的に説明されないのと同様、Quint と Jessel が生前行った悪についても、Jessel の死因についても、何一つ具体的に提示されることはないが、このことは、この物語りにおける ghosts の役割をきわめて良く説明しているように思われる。即ち彼らはこの世の具体的な悪業を背負い、人格的な性格を持った幽霊ではなく、evil の人格化でもなく、evil そのものだということである。しかも、その evil は子供に反映して evil-in-good として示されるのであるから、一言でいえば、人間の中に潜在的に存在する evil であり、この幽霊たちはその symbol の如きものである。従ってこの物語りの ambiguity をめぐってなされて来たさまざまな議論は、evil という概念から眺めることも可能である。女家庭教師の sex suppresion とか社会的な地位とかもある人々にとっては evil と呼んでちいつかえない存在だといえるであろう。James 自身 preface の中で次のようにいっている。

Only make the reader's general vision of evil intense enough, I said to myself—and that already is a charming job—and his own experience, his own imagination, his own sympathy (with the children) and horror (of their false friend) will supply him quite sufficiently with all the particulars. Make him think the evil, make him think it for himself, and you are released from weak specifications.

註
27

V

私は私なりにねじの巻きもとを試み、先ず最初に得た作者の技巧に対する粗獷な驚ろきを失なわないよう心がけながら、いくつかく重要と思われるモチーフを取り出して来た。繰り返しているなら、それらは、愛と死の同一性であり、物語りを貫くトーンは horror というよりむしろ道徳的な evil であること、evil と innocence がいわば evil-in-good ともいふべき存在として共存していること、作者が相反する二つの要素の共時的存在を様々な場面で強調しながら、それらに何の解決も与えていないこと、などであった。ねじの巻きもととは、結局この物語りの ambiguity の私なりの説明であったわけだが、このように並列して見ると、所詮説明などになっていないことに気づかないわけには行かない。つまり、私が取り出して来たいくつかのモチーフは、それぞれが最も単純な意味での矛盾を妊んでいるからである。ここでは一切が直線化することがなく、常に相反する二つの極の間に面積を持っている。しかし、この小論は、頭初から何ら実証的、説得的意図を持つものではないし、その目的は撰択した材料を用いて、折屈的に主観的認識を意志することにあったのであるから、一切を直線化、図式化しようとする意図は放棄されているのである。むしろ、より積極的に、少くとも私には直線化が不可能であったことこそ、この物語りにについて語ろうとする意志を私に持たせた理由であるといふべきであるように思われる。何故なら私とある作品との出会いは、構造や単一化した意味ではなく、様々なその中における関係との出会いを語ることによって確かめられるからである。私はあたかも一人の人間に出会うように、私にとって示唆的なある作品と人格的に出会いたいし、同時に、人間存在の性格と性質とを現わすのは、この種の人格的な出会いにかかっていると考へたいのである。換言すれば、矛盾を妊んだ私と出会ふものは矛盾した人格なのであって、そこに働くものは私の決断と意志があるのみだと思ふからである。

私はこの小論の結論として、更に、evil-in-good について考えたい。それはもちろんこの作品の一面面にすぎないという見方も可能であるが (innocence と evil の問題は James の多くの作品に見られるテーマであるか、evil-in-good という形で、特に社会的なアスペクトを前面に押し出した作品には現われないようである。しかし、そのことについてはここでは触れない) 私にとって主観的な結論を引き出すに、最も興味あるモチーフだからである。私はこの物語りを、矛盾をはらんだまま、「救い」について問いかけて来る物語りであると考えたい。(Miles が最後に Quint を認め、呪いの言葉を吐くという、女家庭教師にとっての救いが完成した時、そこに報われたものは innocent な Miles の死であつたという、逆説的なテーマがふたたび繰り返される。) この物語りと一つの人格として出会つたら、キリスト教的立場に立つ者にとっては For biblical faith, then, the presence of evil is an occasion for obedience rather than for speculation であるからである。James 自身、手法的には心理主義、意識の流れの始祖的存在と見なされようが、思想的には、宗教的な傾向が、手法的心理主義の基盤となつてゐるということも大きな可能性として考えられる。ロマン派や自然主義作家たちが、今日考えられる orthodoxy からかなり遠い地点から題材や手法を撰んだことが多かったのに較べて、これは James の問題点の一つであるように思われる。Randall Stewart はその著書 American Literature and Christian Doctrine において V. S. Pritchett が Two Great American Puritan といふタイトルの下に Henry James と T. S. Eliot を撰んでゐることを紹介し、Hawthorne, Melville, Cather, Eliot, Faulkner, R. P. Warren などと並んで James をキリスト教的立地から見つて、(カトリック、プロテスタントを問わず) 正統に近い位置にある作家であるといふ。James "counter-romantics" because they recognize Original Sin, because they show the conflict between good and evil, because they show man's struggle toward redemption, because they dramatize the necessary role of suffering in the purification of self. James dramatized the miseries of the overcultivated Ego. といつてゐるが、これは私にはきつめて示唆的に思われる。James とキリスト教信仰については改めて論じたいが、James が少くとも、芸術と moral について思いを及ぼしてゐた例として、ここでは一つの目にふれたパッセージを示すに止めたい。

There is one point at which the moral sense and the artistic sense lie very near together; that is the light of the very obvious

truth that the deepest quality of a work of art will always be the quality of the mind of the producer. In proportion as that intelligence is fine will the novel, the picture, the statue partake of the substance of beauty and truth. To be constituted of such elements is, to my vision, to have purpose enough. ^{註3}

evil-in-good とは、私にとって、結局 moral の問題である。そして、先に引いたマタイ伝の比喩のように、二つの次元に分けていい表わさねば不可能な要素が多くあり、又、実際に二つの次元に分けて考えた方が便利であるが、現実の人間存在とは精神と肉体とを兼ね備え、様々な矛盾を内に秘めたままのものであることはいうを俟たない。moral 判断の基準が歴史的状況の変化につれて変化して来たことほど、これを明瞭に物語るものはない。自然に moral のないのは明瞭であるが、仮に人間を精神と肉体(自然)とに抽象化するとして、moral は事実肉をも規制するのであるから、純粹に精神現象ともいい切れないことは明らかである。つまり人間存在そのものが、常に evil-in-good なのであり、moral はその様な人間の性格に向って働くものだということである。言葉をかえていうなら、moral とは精神と肉体を兼ね備えた人間における自然現象ともいうべきであって、世俗の問題であると同時に、精神の問題でもあり、自然と精神の境界線に位するものだといえるであらう。しかし、moral が世俗の知恵という要素を持っている以上、現実にはアプリアリな存在として力を持ちえるとしても、何ゆえアプリアリなのであるか、moral に反した者は何故苦しむか、governance が evil の存在と愛の間にあって何故苦しむか、Miles の愛と死の間でどちらを勝利とするべきか、については、moral 自体は何一つ答えることができないのである。governance の苦しみを性的抑圧その他で説明しても、道徳的な苦悩は依然として残るのであり、先に引いた A. Miller の言葉にしろ、evil をいつ an occasion for obedience ならしめんとしても、その契機について、moral 自体は何一つ語らない。即ち人間存在が evil-in-good である以上、moral はその判断の基準を示さないわけである。私は The Turn of the Screw における ambiguity について語って来たが、それは私にとって、取りもなおさず、moral の ambiguity を意味するといいたいと考える。これを解決するものは、多分、神との応答にしかないであらうし、神との応答に耐える信仰的実存の闘いしかない。moral の真の姿とは、所詮 ambiguous なものであるし、先にのべたようなその本来的性質から ethics of ambiguity とでもいうべきものであらう。私はこの物語りを、

救いの物語りであると考へたいといったが、それはこのような意味なのであって、そこにヒステリックに取り乱した女家庭教師の姿を見るばかりでなく、evil-in-goodの存在に直面してmoralの矛盾に苦しむ姿を見たいのであり、更に私に全存在的な応答を示唆する姿をも見たいのである。The Turn of the Screwのambiguityについて語りながら、それ直線的に解決することを望まず、ambiguityのままに放置するのは、私がJamesの精緻な筆の中に、このような闘いの姿を見出したように思うからである。互いに相矛盾するものの共存、複雑に巻かれたねじの意味はすべて私自身の存在に関わっていることになる。

- 註1 The Art of Fiction ("The Future of the Novel" Vintage Book K. 14) p. 13.
- 註2 Robert Heilman: *The Turn of the Screw as Poem* ('A Casebook on H. J.'s "The Turn of the Screw"', ed. by G. Willen: Thomas Y. Crowell Co., New York: 1960)
- 註3 Leon Edel: *The Psychological Novel*; Rupert Hart-Davis, London; 1955; p. 35.
- 註4 *The Turn of the Screw* ("The Aspern Papers etc." MacMillan, London, 1922) p. 130.
- 註5 *ibid.* p. 132.
- 註6 *ibid.* p. 131.
- 註7 *ibid.* p. 137.
- 註8 Oliver Evans: *James's Air of Evil*. ("Casebook") p. 210.
- 註9 *ibid.* p. 211.
- 註10 *The Turn of the Screw*: p. 170.
- 註11 *ibid.* p. 180.
- 註12 Robert Heilman: *The Turn of the Screw as Poem* ("Casebook") p. 176.
- 註13 *The Turn of the Screw*: p. 210.
- 註14 *ibid.* p. 249.
- 註15 *ibid.* p. 251.
- 註16 *ibid.* p. 210.
- 註17 F. O. Matthiessen: *Henry James*; O. U. P. 1946; p. 93.
- 註18 Charles G. Hoffmann: *Innocent and Evil in James's The Turn of the Screw*; (Casebook") p. 213.

- 16 *The Turn of the Screw*: p. 175.
 20 *ibid.* p. 255.
 21 C. G. Hoffmann: *Innocent and Evil*; p. 212.
 22 *The Turn of the Screw*: p. 145~146.
 23 *ibid.* p. 180.
 24 *ibid.* p. 189.
 25 *ibid.* p. 242.
 26 C. G. Hoffmann: *Innocent and Evil*; p. 222.
 27 *Preface* ("The Aspern Papers etc.") p. XXIV.
 28 Alexander Miller: *Evil* ("A Handbook of Christian Theology" Fontana Books 445 R: 1960) p. 123.
 29 Randall Stewart: *American Literature and Christian Doctrine*; Louisiana State University Press; 1958.
 30 *ibid.* p. 15.
 31 *ibid.* p. 106.
 32 *ibid.* p. 149.
 33 *The Art of Fiction*; p. 26.